

诗

12
2023

诗刊社（北京）



鷹放つ

能村 研三

鎮守の森

あしうらの土やはらかき無月かな

一茎ももつれず咲けり曼珠沙華

駿州の負将の歌碑や虫しぐれ

鰯あらば鰯を立てたし霧の夜

天地の息ととのひて鷹放つ

鷹匠は野にあるひかり集めけり

採りたてはうすくれなゐの新生姜

千々にくたく北斎の波鳥渡る

初鵬の一声に心鞭打たれ

一人づつ訣れてひとり後の月

七月に我が家の家の改築工事のために次女夫婦のマンションに仮移転してから四か月が経った。本宅からは距離にして一キロにも満たないところなのだが、駅に行くバス停もすぐそばにあり、ちょっとした買い物が出る商店街もあり、本宅の周辺よりもはるかに便利なところである。何よりもうれしいのは、ポストがマンションに近い所にあることで、郵便物を頻繁に出すものにとつては有難い。

またマンションの六階からの見晴らしもよく、市川にある二棟の超高層ビルやスカイツリー、天気が良い日には富士山も見えることがある。先日は日が沈む頃ダイヤモンド富士らしきものも見えた。

移転したばかりの八月には江戸川の花火をしつかり見ることが出来た。マンションから五分もかからない距離に小高い丘があり、ここには白幡神社を囲む鎮守の森がある。朝六時半になると一年中毎日ラジオ体操が行われている。少し早起きが出来た日は体操に行くことにしている。体操が始まる前には、近くの氏子の皆さんが熊手と箒をもって銀杏落葉を掃き清めてくれる。

皆ボランティアの人たちばかりだが、その動きを見ていると気持ちが良い。行き合う人とお互いに朝の挨拶をかわし、からりとした人の交わりが爽やかである。

体操が終わった後、本殿に参拝し鬱蒼とした神社の階段をおりて帰宅するのが、一軒の農家の家で炊きたてのお赤飯が販売されている。何の店構えもなく、納屋の奥にいる主に声をかけて頒けてもらっている。近くの道の駅にも出しているそうだが、農家での直接販売は朝六時から八時までで、何回か買っているので主とは親しくなった。

本宅とは近い距離にありながらも昔からの「村」の鎮守の森を守り抜こうとしている地元の人たちの心意気を感じた。

年が明けたら本宅に戻るようになるが、市川にも素朴な人の交わりがあることを知ってうれしかった。

海鳴りのあはひ秋声過りけり
青北風の漁なき漁師嬰を守る
嫁入りのやうに白桃届きけり
金木犀庭の主役に躍り出る
言ひ訳はするなど釣瓶落しかな
竜胆の鈴鳴るやうに風すさぶ
踏み込んで露のたばしる獣道

秋田の田舎の近くに森吉山と言
う千四百七十メートル程の山がある。遠目
にはなだらかで富士山のように見える
が、麓にはマタギの村があつて当然熊も
多くいる。それでも高校の行事に森吉山
への全校登山というのがあつた。登山道
が何通りかあり、今では考えられないこ
とであるが生徒各自が都合のいい道を選
ぶので、頂上で点呼が取られた。日本の
花の百名山にも選ばれ、山毛櫛帯も広々
とあるので秋の黄葉も実に美しい。
登四郎先生に「竹林に一幹かしぐ櫨紅
葉」という御句があり、「竹の春」の季
語にあるように竹の豊かな緑に櫨紅葉の
紅が印象的である。一方森吉山には竹林
がなく、緑と言えば杉林であり、「一幹
かしぐ」というような櫨紅葉が似合うで
あろうか。森吉山の黄葉の見頃は十月末
であるが、先生の御句に触発されて訪ね
たい気持ちが募るばかりである。

濤声集

蠟 箋

千田 百里

* 蠟 箋 を 作 る 巻 貝 拾 ぶ 秋
秋灯や旬のメニューのチヨーク書
神宮の杜の危ふし銀杏散る
かまつかの丹いろは濁世への怒り
秋暑し大船観音前のめり
木暗れより出づれば蕎麦の花盛り

東 経

辻美奈子

* 林檎切るここ東経のどのあたり
無月かなパソコンの闇薄つぺら
秋の蝶日差しを緩く避けてをり
表面張力月代に満たす酒
銀河濃し聞かず語らず母娘
人居らぬ小江戸の路地の秋の雨

蒼茫集

豊年

宮内とし子

* 豊年や志功の菩薩紅さして
芋の露風が一つにしてしまふ
三線の余韻を抱く良夜かな
露けしやこけしの目鼻小さくて
曼珠沙華土手の起伏に添うてをり
挽白の石の減り見せ走り蕎麦

縄張り

七種年男

* 白壁に飛び交ふ影や小鳥来る
豊年や小節をきかす峡の唄
縄張りは一里塚まで秋あかね
中也の詩三行分のわが秋思
海の色弾きて秋刀魚焼かれけり
秋の蜂一か八かの面構へ

汝が色に

栗原公子

シンプルといふは難しよ新豆腐
佇みて方位失ふ大花野
鶏頭にひとあし早き日暮くる
汝が色に疲れてをらむ曼珠沙華
はぐれ咲く白曼珠沙華こそよけれ
* 秋声を聴きをり言葉惜しみつつ

先師との距離

荒井千佐代

花道の下は奈落や曼珠沙華
虫売りの虫の言葉で話しをり
石けりの石はそのまま秋夕焼
萩刈つて雨音すさぶ古刹かな
近づけば死をそそのかす月夜茸
* 遙かとは先師との距離いわしぐも

飛鷹選評



能村 研三

狼男の戸惑うてゐる無月かな

坂井 博

狼男の話は中世ヨーロッパで迷信として広まったようだ。雲におおわれて名月が見えない無月の夜で、さすがの狼男も手持無沙汰なのだろう。無月という曇りがかつて見えなくなった名月であっても、古来の日本人の美意識には見えぬものも愛でるといふ精神があつたのである。

叱られぬ齡となりぬ山椒の実

竹田 絹子

齡を重ね、ある程度の年齢に達すると、周りの人たちも寛大になるのか、少々の失敗をしても叱られることが無くなった。叱られなくなったことは、確かによいことなのだが、何か寂しさもあるように思えた。この句、季語の「山椒の実」が実によく効いている。山椒の実は秋には、赤くなった実が裂け、中の黒い実には、ピリッと清涼感のある辛さを感じる。

白杖の色なき風に踏み出せり

池田 文枝

白杖は視覚障害が歩行するときに使う白い杖。目が見えなくても、常に前向きに世の中に出ようという気持がすばらしい。色の識別は少し弱いかもしれないが、色なき風の中を杖を持って今日も一歩を踏み出したのだ。

秋うらら影がかくれぬかくれんぼ

川崎登美子

秋うららは、春の「うららか」に対して秋晴の穏やかな天候と気分を伝えてくれる。幼い時に遊んだかくれんぼのことが思い出された。完全に隠れ切ったと思つたが、影までは隠し得なかつた。軽く諧謔性のある句か。

山竜胆生けて色濃き青さかな

長山 正子

山に咲く竜胆は家に持ち帰って花器に活けてみると、野にある風情とはまた違って濃い花の色はつつまじやかで、しなやかである。鮮やかな青色は吸い込まれるような美しさである。

満月や確信となる自然治癒

頓所 敏雄

月の満ち欠けが、人間の体と心に大きな影響を与えたいわれている。病院での治療を終えて、あとは自然の治癒力に任ずしかない。満月の夜月を見上げながら必ず治癒することを確信した。

新蕎麦を旨しと云うて「通」談義

山中 洋子

蕎麦通だという人が言うことに、蕎麦は香りが命だから、つゆはほんのちよつとしかつけてはいけない、噛まずに飲み込むように大きな音を盛大に立てて啜り込むのがよいとか。新蕎麦を啜りながら「通」談義が続いた。

潮鳴集

営林署

広海あぐり

囀鳴く

岡澤田鶴

* 秋の暮木場に名残の営林署
深川祭触るものみな熱もてり
軋ませて釣瓶落しの板戸引く
野分晴安房の入江の舟溜り
竿先に秋の境の波を巻く

* 星飛ぶや未来に一番近き駅
囀鳴く抜身のやうな隠れ沼
木の実落つ雨の水面へまつすぐに
厨より見やる籬の柚の黄ばみ
門閉ざす音木犀のにはひけり

小鳥来る

多田ユリ子

柱の記憶

清水佑実子

蟻螂の眼のなか風の通りけり
何するとなき日の手足昼の虫
小鳥来るけふはケーキを焼くことに
まるごとの私を曝す稲光
火櫛の壺にすすきのひと掴み

人乗せることを覚えて馬肥ゆる
万華鏡廻せば未来秋うらら
* 見世蔵の柱の記憶秋惜しむ
実むらさき断ることも生き上手
カーテンを次つぎ洗ひ鳴日和

ふふふふ

菅原健一

ピエロの涙

七田文子

ふふふふと不敵に嗤ふ栢榴かな
長月のインコさみしき人の真似
* 人間を抜け来て色なき風に逢ふ
ピアスなき耳朶に触るるや秋の風
秋夕焼見えない銃を撃つ素振り

目交に黙禱の海鳥渡る
墓に吹く風聴きにゆく秋彼岸
* 流れないピエロの涙ふと秋思
秋や秋過客のやうに立ち止まり
先つぽが好き端つこが好き赤蜻蛉

月天心

関根揺華

月山

榎本秀治

天ぬきでまづは一献走りそぼ
会へばすぐ十五に戻る赤とんぼ
* 月天心むかしの見ゆる旧街道
淋しき日秋のゴリラに会ひにゆく
銀河濃し時をこぼして砂時計

* 月山の水をかたちに新豆腐
一芸の無くて一癖秋の蠅
かなかなや戸締め早き城下町
ちちろ鳴く昼なほ暗き五合庵
古民家の大きな天窓星月夜

なにがなし

村上葉子

白桃

兵藤恵

蟻蛸とぶ空へは飛べぬ蟻蛸とぶ
* なにがなし触りたくなる鶏頭花
秋茄子嫁にとつさり持たせやる
下戸といふ不仕合せあり新走
混沌の地球に刺さる曼珠沙華

祭果てうらもおもても無く眠る
模擬店に並べてありぬ青蜜柑
* 白桃は抱かねば帰路は急がねば
二間開け放ち月見や獺祭忌
隠語めく草の実付けて帰り来る

沖作品



能村研三選

* 狼男の戸惑うてゐる無月かな

千葉

坂井 博

正門の薄き一灯かねたたき
* 秋うらら影がかくれぬかくれんぼ

川崎登美子

ボヘミアの一輪挿しに今日は菊
はちきれし母の海苔巻運動会
娑婆つ気は人一倍よ生身魂

逆賊てふ義士の陣屋に秋の風

東京

竹田 絹子

やはらかな風にもつれて秋桜
秋草を挿して野の風生まれ来し
無造作に置いて絵になる通草かな

鄙の宿魔女の杖めく自然生

* 叱られぬ齢となりぬ山椒の実

* 白杖の色なき風に踏み出せり

千葉

池田 文枝

老僧の声朗々と竹の春
ポランティアの守る里山小鳥来る

秋澄めりぴんと突き立つ馬の耳

時の鐘の残響長し秋の暮

この野辺は知る人ぞ知る吾亦紅
マンシヨンの骨組吊られ秋暑かな

朝日差し水澄む底に未来都市

長山 正子

充電器据うる駅舎の秋うらら
* 山竜胆生けて色濃き青さかな

夕暮に安堵してゐる刈田かな

老いてなほ女は陽気秋高し

* 満月や確信となる自然治癒

東京

頓所敏雄

秋日影一条胸に来て乱る
鯨啼く深層海流ありと聞く

赤とんぼとまれ書瘻の指なれど

黒なまこ即身戊仏できさうな